

メディアに囚われた女たち

村上直之

メディアと女性というテーマでかならず問題となるのは、メディアが女性をどのように描いてきたかという問題だが、最初に、メディアの中で女性がどのように表現されているかの究極の表現を紹介しておこう。明治の中期あたりの新聞に「首無し美人の死体発見される」という見出しの記事が載った。これである。首がないのになぜ死体が美人であることが分かるのか。つまり、メディアというものは被害者の女性は美人にしなければ気がすまない。死体で首がないというグロテスクさと、女性への美的幻想を混在させている。このような表現が基本的に男性の女性に対する視線であることはいうまでもない。

メディアと女性というテーマで二番目に問題になるのは、報道と女性という問題である。はじめの問題と関連するが、最近の新聞や雑誌の事件報道に美人という言葉が減ってきている。美人とかいうように女性を特別扱いするのをやめようという市民運動が各地にあり、新聞や雑誌、テレビ等で女性を特別視、あるいは差別視するような表現があればすぐに投書するというような活動をしている。現場の人に聞くと、マスコミというのは読者・視聴者の反応を常に敏感に気にしているため、苦情がきたことに関してはすぐにそれをやめるといった傾向があるようだ。このことは皆さんよく知っておいたほうがよいだろう。

次に、報道現場と女性ということを考えると、やはりこの職場は男性中心の職場であるといえる。24時間体制の非常に不規則な現場であって、女性が雇用機会均等法によって何時になってもその現場から離れなくてもいいという法的規制がとれたとしても、まだまだ男性中心の社会であるというようなことが女性記者あるいは女性ジャーナリストからの不満としてよくあがっている。これも現場の人から聞いた話だが、入社試験で成績が優秀な順に採用したら女ばかりになってしまうので、上位をカットして男を採るようにしているという。

三番目に女性とメディアということを経験するときに忘れてはならない問題がある。これはフェミニスト側の批判というのはあまりない領域であって、メディア好きな女たちという問題である。今のテレビや週刊誌などの類を支えているのは女性の視聴者・読者

であるということがよく指摘される。お昼のワイドショーや女性週刊誌はお茶の間の主婦を対象にし、また主婦達もそういうものを好む。これは何なのかを考えてみるとこれは現代ばかりではなく、歴史的にもそうであるといえる。

では、現代のマスコミの状況をどうとらえたらいいのか。3つのベクトルを考えてみたいのだが、第一のベクトルは〈情報の速度の軸〉である。メディアの発達には同時性—ニュースというものは起こった出来事できるだけ早く伝えなくては—という指向性を持っている。スピードアップばかりをはかると、非常に感覚的な情報になる。新聞の場合は、即時的感覚的になってきたために一つ一つの出来事の背景を説明する余裕がないため再現ドキュメンタリー的な文体となり、レイアウトが細分化されている。つまりいろいろな情報は盛り込まれるがそれぞれの内容はうすくなる。

二番目の軸として〈現場性〉(臨場性)を無限にめぐらすということがあげられる。これは情報の加工よりも素材性を重んじるということだ。テレビも新聞も得た情報は加工しなければならないわけだが、この加工の仕方が大きく変化してきている。例えばテレビだとフィクションドラマからドキュメンタリータッチのドラマへ変化している。非常にアクチュアリティを重んじるようになった。さらに、演出の少ないスポーツや生ニュース、あるいはアドリブの多い番組が時代感覚にあうようになってきた。これを私は「娯楽番組の報道化」と呼んだことがある。

それと関連して、極私的なヒューマンインタレストをめぐす〈情報の私的関心〉が三つ目としてあげられる。組織的なものや社会の問題を考えるとというようなドキュメンタリー的な番組より、個人的・本音的な情報に移っているのが現代の状況だといえる。新聞などは署名記事が増え、ラジオではパーソナリティやDJが隆盛しているという傾向が強くなり、テレビではニュースキャスターが登場した。それまでニュース番組というのは客観報道というものでアナウンサーの主観は絶対いれないというのが基本だったが、1985年あたりから意見や感想をいうのが蔓延している。今まで影に隠れていた人間が前面にできるようになった。それを私は、先ほど娯楽番組がドキュメンタリー化したというのと逆に「報道の芸能化」と呼んだことがある。

これはテレビなどの映像メディアの本来持っている映像の特質だといえる。テレビ画面というものは必ず

至近距離で被写体を捉えるのだが、私達の日常のリアリティの中でそのような機会は数少ない。家族・友人・会社関係といった身近な人の中でしかなかったコミュニケーションがアップで人を見るということだったが、テレビではいきなりみんなアップで映る。エドワード・ホールはこれを密接距離と呼んだが、まさにこの密接距離でテレビ画面と接するわけで、そのような画像がはらむ必然の傾向として私的な関心にベクトルが進むのは当然と思われる。映画は以前からクローズアップなどの手法があったが、いくら大画面であれ暗闇の中で遠い席からみるわけで、そのような意味では舞台芸術と同じく公衆距離からみているといえる。それに加えて現代社会が管理化し、巨大組織化したという疎外感からタテマエよりも本音的な情報を重んじるという傾向にあるという指摘もできる。が、やはりこれは映像メディアの必然的な問題であるように思う。

1985年あたりからこれらの傾向が出てきたわけだが、1985年というのは民放でゴールデンタイムと呼ばれる広告費の高い時間帯にニュース番組が圧倒的に増えた年だといえる。70年代は演出の時代、80年代は事実の時代といわれたが、この事実の時代が今も続いている。では事実の時代はニュースが増えて人々が社会的な問題に関心を持ったのかということではなく、私的なもの、生の非常に身近な、いろんなものを見ようという関心でメディアと接している。

こうしたメディアの技術的な進歩と女性のメディア好きの傾向はどうやらうまく歩調を合わせて現在のメディア状況は存在するわけで、これをどう考えるべきかという疑問を残して話を閉じることにしたい。

(総合文化学科教授)

就職活動を終えて

坂田 美季

大学3年の冬頃から、今まで何も考えていなかったような学生でさえも、なんとなくそわそわと、心が落ち着かなくなる。「就職」の二文字が頭から離れず、いつも気になっているのである。これは誰もが通る道だ、とは思ってみても、ここ数年の日本経済の低迷は企業の雇用状況に大きな影響を及ぼしており、道はますます険しいのが現状である。特に女子学生の就職状況は悪く、「どしゃぶり」や「氷河期」と言われるほどののである。

男女雇用機会均等法施行後、女子学生の総合職は一般的に増加しているようなイメージがあるが、総合職

として女子を採用している企業は業種や職種が限定されているのが現実である。総合職として働くためには就職活動も大変だが、むしろ入社後に働き続けることの方がもっと大変なのである。現在、企業は法律によって育児休業制度を制定してはいるが、実際に利用した人の実績がないことや、今後の利用見通しも立っていないというのが大半である。

実際の就職活動のなかには、他の学生との差異を生み出す要素がいくつかある。そのひとつが性別によるものである。まず、就職活動の時期は、男女でははっきりと分けられている。一般に、男子学生は春から始まり、7月頃には内々定をもらうのに対して、女子学生は6月頃から8月にかけて活動するのである。採用についてたずねようと、企業に電話をしても、女子であるために教えてもらえなかったり、合同セミナーで面と向かってははっきりと「女子の採用はありません」と言われることもよくある。

また、女子学生は採用企業だけでなく、就職情報会社からも男女の差を思い知らされてしまう。例えば一部の男子学生には早い時期から会社資料が送られてくるのに、女子にはなかなか送られてこないこともよくある。

性別だけでなく、大学名で選考されることも相変わらずあり、企業の採用担当者と面接で話をするまでには、いくつものハードルをクリアしなければならないのである。

私自身は幸運なことに、就職活動を無事に終えることができたが、テレビで今なお活動を続けている学生の姿を見ると胸が痛い。今まで平穩無事に過ごしてきたため、就職は私にとって初めてぶつかった大きな壁であった。性別や大学名によって区別され、精神的苦痛もあり、また、夏の暑いときに活動することによって肉体的疲労もずいぶん感じられた。しかし、周囲の方の温かい励ましで立ち直ることもできたと思う。

就職活動のなかで自分自身をみつめなおすことができ、企業や社会に対する見方もよい方向に変化したので、今となっては私自身よい経験だったと感じている。

('95年3月 総合文化学科卒)

女性に対する就職差別について

早川 恵

氷河期と呼ばれるほどの'94年就職戦線。特に、私たち女子大生にとっては、希望する業界から内定をもらうことが、まるで宝くじにあたるかのような感さえ受けました。そんな中で、今回のテーマである就職差

別について、私なりに感じたこと・思ったことを、皆さんに知らせたいと思います。

まず、4月に入ってから、電話で直接、今年度の採用状況についてやセミナーの開催予定・予約について尋ねてみました。私の場合、100社ほど電話をしてみたのですが、そのうち3割～4割は、「女子の採用予定はありません」と言われました。特に女子大だと、女子学生＝事務ととらえられることが多く、また、総合職希望ですと伝えても、「1年目から札幌勤務ですが、本当にそれでも総合職でとおっしゃるのですか」等、とてつもない条件を出される事もありました。

また、6月に入ってセミナーなどに実際に足を運んでから、「ちなみに女子の採用は考えていません」という態度にでられたり、選考が始まってからも、「君

は結婚する気がないのか。女は就職するよりも結婚した方が幸せだよ」などとあからさまに言われたりもしました。そういった企業がたくさんあることは事実なのです。

しかし、そうではない企業もたくさんあります。性別を問わず、能力や個性を評価する企業です。もしも、まだこの業界というふうに定まっていなかったのなら、広く様々な企業を渡り歩くことをおすすめします。意外な所で意外な自分の適性を発見するかもしれません。

最後になりましたが、今年の就職戦線も、去年と同様、厳しいとは思いますが、強い気持ちで「就職したい」と思っていれば、必ず願いは通じます。自分の力を信じて、はじめての就職戦線を乗り切ってくださいね。

('95年3月 総合文化学科卒)

『女と男』

原 田 園 子

「テノールが良いわね。」いや「ソプラノがやっぱり良いよ。」と年末の音楽番組を見ながら交わされた男女の会話から、其々の性をもって生まれた男女の感性の違い——あるいは、この違いがあるのかわからないのか——についてこのエッセイを書いてみようかなと思っていた。ところが、晴天霹靂の1月17日早朝の出来事。これに端を発したこの数週間に、我が家をはじめとして、この近辺で自ら体験した、あるいは、報道によって見聞きした人々の働きから、女・男としての肉体をもって生まれた体力・腕力の相違を否応なく見せ付けられてしまった。

あれから一ヵ月余りの、朝一番の用事が水汲みであった。坂下の小学校までポリ容器をもって貰いに行った。初老のカップルだけのお宅の分も引き受け、三家族分をあずかって車で通ったが、私が一度に抱えられたのは、20ℓ入りを一個、あるいは10ℓ入りを両手に一個ずつであった。19歳の若者は、20ℓ入りを両手に一個ずつ車まで二度三度と往復しても荒い息さえしていなかった。

ありったけの力を出して何度か試みても微動だにしない、傾いていた研究室のファイルキャビネット。通りかかった McElwain 先生が頬をほんのり染める程度の頑張りでも、もとの位置におさめてくださった。押しでも、けとばしても、ピクともしなかったドアを頼もしいレスキュー隊の若き教職員

男性に開けてもらわれた方々も多いと思う。

大きな重い梁や柱、壁を取り除きながら、瓦礫のしたから何人もの見ず知らずの人達を次々と救いだしたティーンエージャーの男の子達。大渋滞の遠路を何時間もかけて車で駆け付け、一休みもすることなく、炊き出し用の何杯もの大釜の豚汁を力いっぱいかき混ぜる働き盛りの男達。

一方、床にうずたかく山になった書物を本棚におさめたり、あるいは、倒れた食器棚から散乱した割れたガラスや陶器のかげらを拾い集め何度も掃除機をかける半日の作業だけで、残りの半日はボーッとしている数日を過ごした女。

年齢を差し引いても、腕力と体力の性差を見せつけられたこの数週間であった。

人間として生を受けた両性は、人として同等であることはゆるぎの無いことで、認識され、尊重されるべきことであるのは言うまでもないことであるが、この度の大地震以後の人々の活動を見聞きしたり体験することによって、個々の、その性の違いも含む肉体的・精神的・知的に働く能力の違いによって、其々の性は、この人間社会での役割が異なっているという現実に直面させられた。

時が経つにつれて、復旧・復興に向けて皆の働きがすすんでいくなかで、これらの能力の違いがどんな状況にあっても負の方向に拡張され、肉体的・精神的・知的暴力化されることなく、快い形で活かされることをあらためて願うようになった。

(英文学科教授)

1994年度年間活動報告

I 講演会

ワークショップ 1994年5月20日(金)

「恋愛の物語」

難波江和英氏(神戸女学院大学英文学科助教授) [出席者:60名]

座談会 1994年5月27日(金)

「バングラデシュの母親たち」(英語)

ミナ・マラカール氏(バングラデシュ:女医、寺子屋教育・母親教育の普及に携わる。アジアキリスト教教育基金の招聘により来日。) [出席者:28名]

講演会 1994年6月29日(水)

“On the Black Womanist Self in my Work”(英語)

ポール・マーシャル氏(アメリカ:女性作家、ヴァージニア・コモンウェルス大学教授) [出席者:72名]

講演会(協賛) 1994年7月6日(水)

「フェミニズムを超えて——女性の生き方再考」

北村春江氏(兵庫県芦屋市市長)

主催:神戸女学院大学大学院文学研究科社会学専攻院生会

[出席者:40名]

講演会 1994年12月13日(火)

「メディアに囚われた女たち」

村上直之氏(神戸女学院大学総合文化学科教授) [出席者:20名]

〈講演要旨は本紙1頁・2頁「メディアに囚われた女たち」に掲載。〉

II 研究助成

*本年度の交付申請はなし。

III 学会等出張補助

*本年度の交付申請はなし。

IV 出版物

『女性学評論』9号 特集:女性学の成立をめぐって (1995年3月発行)

「ニューズレター」No.17

(1994年9月発行)

V AWI (The Asian Women's Institute : アジア女性研究所) との交流

*1995年度には、AWI が企画した国際交流プログラムにより、本学より学生1名をインド・パキスタンへ約1か月派遣する予定である。1994年9月から12月にかけて派遣学生の選考をすすめてきたが、作文および面接審査の結果、総合文化学科3回生川口美礼さんに決定した。

VI その他

*学生活動に対する補助:「やぎの会」(環境問題を考える会)の諸活動に対し支援を行った。

図書・資料をご利用ください

女性学インスティテュートでは、女性学関係の図書および資料の閲覧・貸出を、下記の要領で行っています。

◎開室時間 月～金 8:30～16:30

*夏・冬期休業中の一定期間は閉室となります。

◎利用資格 本学教職員・学生・卒業生

◎収集分野 心理・法律・労働・メディア・人権・女性論・女性史・家族・パートナーシップ・ライフスタイル・性・からだ・環境・社会言語・表現・文学

◎閲覧 開室時間中は自由にご覧ください。

◎貸出期間 2週間

◎貸出冊数 8冊まで

◎検索方法 図書目録カードBOXを当インスティテュートおよび図書館新館1階に設置しています。ぜひ、ご利用ください。当インスティテュートではコンピューター検索も可能です。

※ 閲覧・貸出希望者は、デフォレスト館3階303号室(D-303)まで

1994年度女性学インスティテュート編集委員

原田園子、本城智子(委員長)、飯田正紀、井上紀子、内田樹(ABC順)

編集・発行:神戸女学院大学女性学インスティテュート
〒662 西宮市岡田山4-1 ☎(0798)51-8545